

平岩弓枝
花の影



平岩弓枝
花の影



花の影

昭和五十六年七月三十日 第一刷
昭和五十七年七月二十日 第七刷

定価 九二〇円

著者 平 岩 弓 枝

発行者 杉 村 友 一

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三ノ二三

印刷所 凸版印刷

製本所 加藤製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

花の影／目次

はじめに

5

佐保子・十八歳のとき

7

佐保子・二十四歳のとき

40

佐保子・三十五歳のとき

76

佐保子・四十歳のとき

110

佐保子・五十一歳のとき

143

佐保子・六十歳のとき

176

佐保子・七十歳のとき

209

佐保子・八十二歳のとき

242

装
幀
栗
屋
充

花 の 影

はじめに

年齢の所為か、花にひどく心がひっかかるようになってしまった。殊に桜である。年に一度しか咲かない花は数多いのに、桜はその寿命があまりに短い故か、咲く季節を迎えると、あと何回、この花の咲くのに出会えるかなどと考えていて、先輩にまだ早いぞと笑われる始末である。

或る時、桜の一日を女の一生になぞらえられないかと思った。

桜の二十四時間を八つに分断して、十代から八十代までの女の生涯の断面図を描く。

作中人物は無論、十代から八十代まで年をとって行くのだけれども、人間を取り囲んでいる社会は、桜の一日であるから、十代の場合も八十代の場合も、現代である。

桜に夢中になったあげくに誕生した小説だが、歴史や社会を無視して一人の女が描けるのは、楽しかった。

佐保子・十八歳のとき

一

夜のすみに、僅かに白さが感じられるほどの時刻であった。

離れ家の玄関の外に立って、佐保子は母屋のむこう側にある門を通ってくる筈の医者を待っていた。

あたりは、まだ闇である。

桜は、その闇を、咲いている部分だけ白く染めていた。

母屋と、この離れ家の、ちょうど中間ぐらいにある吉野桜である。

花の白さだけが頼りのような佐保子の気持であった。

こんな時刻に、かかりつけでもない医者がおいそれとかけつけてくれるものかどうか。

唯一の心だのみは、急病人が少々、世間に名の知れた版画家であることだった。医者がもし、輪西栄治郎の名を知っていれば、いくらかの配慮があるかも知れない。

佐保子は、家の中の気配にも、耳をすませた。

玄関を入ると、ふみこみの二畳があつて、その左側が居間、更に奥まった六畳が、母達の寝室であつた。玄関の右脇にある佐保子の部屋とは廊下と小さな台所をへだてているので、佐保子は母が起しに来るまで、寝室の異変に気づかなかつた。

「お父様の様子が可笑しいのよ、すぐ、山本医院へ電話してちょうだい」

小柄な母は、いつも寝巻にしている白地の浴衣の衿を両手でかき合せるようにして、すぐ寝室へ駆け戻って行った。

電話帳で山本医院の電話番号を調べ、電話をかけてから、寝室の外へ行ってみると、病人を上げます母の低い声が聞えていた。

「お医者さん、すぐ来ますって」

寝室の襖は開けずに、佐保子は自分の部屋へ戻ってバジャマをセーターとジーンズに着がえ、その上に綿入れの赤い格子柄の半天をひっかけ、玄関の外へ出た。

医者が間違つて、母屋へ行かないための用心のつもりであつた。

車の音が聞えたのは、空に明るさがみえて来てからであつた。

佐保子は走って行って、小型車から下りたばかりの医者を、離れ家へ案内した。

「御病人は、どなたですか」

中年の医者が、桜の木の下を通りすぎるとき、佐保子に訊いた。

「父です」

という佐保子の返事に、

「輪西先生ですか」

急に足を早めた。

玄関には声をききつけたらしく母が出ていた。医者の手をとらんばかりにして奥へひっぱって行く。

寝室へ入った医者は、あつという間にとび出して来た。まだ玄関に立っていた佐保子の横で慌しく、どこかへ電話をかけている。

只事ではないと思い、佐保子は寝室へ行った。襖は医者が出て行った時のまま、開けっぱなしになっていて、そこから母の異様な姿がみえた。

右手を、はだけた病人の胸へあてがって、強く押しながら、口に口を近づけて、激しく息を吹き込んでいる。心臓マッサージをしているのだと気がついたのは、ずっとあとのことで、その時の佐保子の眼に残ったのは、浴衣の袖をたくし上げ、衿も裾もはだけ放題の母の姿態の、なんともいえないみだりがましさであった。

失いかけている病人の命をとりとめようと必死になっている看護人の姿は、なにをしようと崇高であつて不思議はないのに、佐保子が我が母をみだらなと感じたのは、母の相手が、佐保子にとって、血の続かない「父」であつたからかも知れなかった。

医者が佐保子を押しのけるようにして寝室へ戻って行き、それをきっかけに、佐保子はその場所をはなれた。

次に、医者に呼ばれて佐保子が寢室へ行ったとき、八年間、父と呼んだ人の顔には、もう白い布がかけられていた。

その日の夕刊に、輪西栄治郎の病死は写真入りで報じられたが、葬儀はおるか、通夜の段どしさえついていない始末で、狭い離れ家には知らせをきいてかけつけて来た栄治郎の親類やら知人友人が額を集めて談合していたが、いったい、なにがいつ決まるやら、ひそひそ話が時折、大声になったり、人が入れかわり立ちかわり、出入りするのを佐保子は玄関脇の部屋で、身を縮めてきいていた。

奥の部屋は、もうのぞきたくもなかった。

納棺もまだ済んで居らず、歿^{なくな}った人はまだそのままに放っておかれていた。傍には、普段着に着がえた母が、佐保子に声をかけるのも忘れて、すわり込んでいる。

「佐保子ちゃん、うちへ来て食事をしないか」

襖の外から声をかけてくれたのは、母屋の主人であった。

岩生一良といって画家でもあり、陶芸家としても名の知れた人である。

「うどんを煮たんだよ。おいで」

部屋から出て来た佐保子の手をとると、開けはなしになっている六畳の、集っている人々を一瞥^{いち}しただけで、外へ出る。

「世津子さんにも声をかけたいが、今は仏さんの傍を離れとうないだろうし、なんにも咽喉を通るまいと、うちのがいうのでね」

母屋までの道は、夜になっている。

一日が、どうやって過ぎたのかと、佐保子は思う。

お午は、岩生一良の妻の静江が、餅を焼いて海苔にくるんだのを、母のと二人分、届けてくれたが、母の皿のは、そのまま、台所で固くなっている。

母屋の玄関に入ると、電気の色までが明るくみえた。

温かいものが、いきなり佐保子を包み込んでくれたようである。この家の空気は、いつもそうであった。

夫婦二人だけなのに、どこか陽気で屈託がない。

「さあさあ、ここへいらっしゃい。お腹がすいたでしょう。このうどん、手打ちなのよ」

居間の桑のテーブルに、湯気の立ったどんぶりが静江の手で置かれたばかりであった。

木の箸も、七味唐辛子も、すでに並んでいる。白菜の漬物が、織部焼の鉢に体裁よく盛ってもあった。

「さあ、早く、おあがり」

一良にうながされて、佐保子はお辞儀をして箸をとった。

八年前、はじめてこの土地へ来たときも、そうだったと思った。

母と二人、弘前を出て、上野駅で輪西栄治郎の出迎えを受けて、そのまま、電車を二度乗りかえて、この町へ来た。

たどり着いた先が、この家で、やはりこの居間で三人並んで、熱いうどんを御馳走になった。

あの時は、まだ十歳で、母が自分を伴って上京した事情は知らなかったが、弘前からの長旅の間の母の様子といい、出迎えてくれたのが、以前、弘前の、母の婚家である旅館へ桜の季節に長逗留^{とうりゅう}していた客だったことなど、なにか不安で、心細かった。

「栄治郎さんの御親類は、まだお話がまとまらんですか」

佐保子のために、お茶をいれながら、気づかわしげに、静江が夫の顔をみた。

「仏さまになった人を、いつまでも放っておいて、お坊さんも呼ばないなんて、どうかしていますよ。仮通夜にしたって、するべきことをしなけりゃあ……」

一良が眼を上げて、妻をたしなめた。

夫婦はどちらも丸っこい体つきをしている。

柔和な眼許も、頤^{あご}のあたりの感じも兄妹のようによく似ているのは、長年、連れ添った夫婦がどこか雰囲気^{ふんいき}が似てくるという、典型でもあろうか。

いい夫婦というのは、一良夫婦のようなのをいうのだと、佐保子は思っていた。

そうした考え方の裏には、弘前の父と添いとげなかった母への非難がある。

もっとも、弘前の父と、輪西栄治郎と、どちらが母にとってお似合いかといえ、それは間違いない、栄治郎のほうがあった。

母と並べれば、誰がみても美男美女の組み合わせであった。

どちらも、もう四十代なのに、お雛さまのように典雅であった。二人ともやや細面^{ほそおもて}で彫の深い容貌であった。

殊に母は眼に魅力がある。表情が豊かで情熱的によく光る。柴治郎の眼は、どちらかというところ童子の眼であった。

眼のせいで、柴治郎が童顔にみえることがある。

そういう意味では、母の眼がいつも柴治郎を包み込み羽交い締めにしているようなところがないでもなかった。

弘前の父の顔は、佐保子の記憶の中でかなり薄くなっていた。

十歳で別れて、八年間、逢っていない。

醜男ではなかったが、平凡な印象であった。

古い旅館の帳場には、いつも母がすわっていて、客を送り迎えしていた。

調理場で板前と献立の相談をするのも、女中達に指図するのも母の役目で、父は、いつも奥の居間で碁盤にむかっていることが多い。囲碁は、素人にしてはかなりの腕だったのかも知れない。

佐保子がうどんを食べ終えた時、母屋の玄関があいた。

「一良先生、ちょっと……」

呼んでいるのは、柴治郎の親類の一人で、一良が立って行くと、佐保子を気にする風に小さな声で耳許にささやいている。

「そりゃいくらなんでもあんまりじゃないかね」

突然、一良の声が大きくなった。日頃、温厚な人には珍しい激昂ぶりである。

「仮にも八年という実績があるんだ。せめて、今夜は、ここでお通夜をして、その上で輪西家の

菩提寺へ運ぶというなら、納得が行くがね」

「ですが、ここでは世間体が……」

親類の男は、一良の思いがけない反対に辟易へきえきした様子であった。

「なにが世間体だね、栄治郎君と世津子さんのことは、今までにマスコミがいやというほど書き立てて、世間に知れ渡っている。今更世間体を気づかうより、死んだ人の気持、残された人の気持を考えてあげたらどうなのか」

外に車の停る音が、派手に聞えた。

そのあたりに出迎えに立っていたらしい人が、なにかいうのが聞え、やがて、母屋の外から、「伯父さん、本宅の宗太郎君が来ましたよ」

と呼ぶ声がして、親類の男はあたふたと出て行った。

「あの人は、栄治郎さんの、なにに当るのかね」

一良が訊いたが、佐保子は返事が出来なかった。

父の親類といわれても、はじめてみる顔ばかりであった。友人知人もそうである。青梅あずみの、この家へ移ってから、栄治郎はそうした人間関係と絶縁して暮して来た。

「とにかく、行こう、お母さんが心配だ」

一良にいわれるまでもなく、佐保子も母が心がかりだった。

話の様子では、栄治郎の遺体をここからどこかへ移すらしい。

佐保子と一良が、離れの玄関に入ると若い男の、よく透る声が目にとび込んで来た。